

二分二十四秒のその先へ

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

三年 伊藤 理 乃

走ることが好きだ。だから私は、歩みを止めない。だから私は、まだ見ぬ自分に出会いたい。一歩ずつ一歩ずつ自分の限界のその先に向かって、私は走ってゆく。

足が重い。ハアハアと呼吸も忙しくなってきた。暑い、苦しい、やめたい。中距離の練習は、はつきり言って辛い。それでも私は、三年間陸上部に所属し、中距離を走り続けた。しかし、一五〇〇メートルに比べて、全然記録の伸びない八〇〇メートルは嫌いだ。いつもゴールの後の掲示板には二分三十一秒の文字。がっかりする思いと毎日ご指導してくれる先生や、応援してくれる陸上部の皆に申し訳ない思いで胸がきゅつとなる。「自分には八〇〇は向いていないのかもしれない」と何度思ったことだろう。それでも毎日「次は二分三十秒を切って自己ベストを出すんだ」と自分に言い聞かせて走りこんだ。

今年が中学校最後の夏。だからこそ、八〇〇メートルと一五〇〇メートルの両方に挑戦しようと決めたのは四月だった。三年間やってきたことを出し切って悔いなく引退しようと心に決めた。二種目こなすことは、容易ではない。しかし、苦手な八〇〇

メートルにもチャレンジして三年間を終えたいと思った。

そこから、日を追うごとにどんどん練習の強度は高まっていた。毎日走り終わった後は倒れこんでしまうほど辛い練習に明け暮れる日々。「こんなに練習しても記録が出ないなら八〇〇はやめようかな」と悩んだときもあった。それでも練習を続けたのは中距離が、走ることが、好きだったからだ。走るときは一人だ。孤独な自分との戦い。弱気になりそうな自分、辛さから逃げ出そうとする自分と向き合うことは苦しい。しかし、その苦しみを乗り越えたとき、成長した自分に出会えることが何より嬉しく、そこに惹かれた。だから、私は走り続けた。二種目に挑戦し、練習を重ね一回り大きくなった自分に出会いたいという一心で。

この日は最後の県通信陸上の日。「中学校最後の八〇〇になるかもしれないから思いっ切り行つて来い」と顧問の先生に送り出され、予選に向かったのは七月五日のことだった。自己ベストを大きく更新し二分二十七秒で予選を終えた私は確実に強くなっていた。嬉しかった。そして、今までは遥か遠くの舞台だった東北大会への進出もなかった決勝へと駒を進めた。

決勝のスタートラインに立つ私。緊張はしなかった。大きく息を吐く。スタートの合図で勢いよく飛び出した。行くしかないと思ったから。苦しいレースだった。それでも私を前進させたのは今までの練習と陸上が好きという強い気持ちだった。前だけを見つめ、乳酸が溜まった足でゴールをひたすらに目指す。苦しいときこそ、苦しみの先を思い描いて走った毎日。今こそ、その苦しみの先にある新しい自分に出会おうんだという思いでゴールに飛び込んだ。汗で滲む目に映ったのは掲示板の二分二十七秒四九、

第七位の文字。東北大会への切符を手にすることができるのは四位までだ。その瞬間ここで八〇〇メートル走への三年間の挑戦が終わるのだと思った。寂しかった。まだまだ新しい自分を追い求め、八〇〇メートルに挑戦したかった。

大会を終えた帰り道、先生から一本の電話があった。それは、八〇〇メートル走で四位以内に入った人の中で他種目に出場する人がいて欠員が出たため、繰り上げで東北大会に出場できることになったというものだった。「もう一度最後の八〇〇メートルに挑戦する機会を貰ったんだ」そう思った。私は覚悟を決めた。自分の最高の走りをして限界を越えてみせる、固く心に誓った。

「二分二十四秒を切る」それが今の目標だ。このタイムを出すことは簡単ではないと分かっている。だからこそ挑戦したいし、その記録を突破したい。そこには、弱い心に負けそうになる自分が、苦しい所で投げ出しそうになる自分がいる。それもすべてタイムと一緒に突き破りたい。陸上が好き、走ることが好きという気持ちを持ち続け、辛い練習を乗り越えてきた自分が私にはついていてと確信しているから。

午前八時ちょうど、今日も練習が始まる。東の空に輝く太陽に照らされ、私は走る。二分二十四秒という、高く大きな目標を越えられるように。絶対に越えてみせるために。その先に立つ自分に出会うために。

作文を書くに当たって

私の3年間の部活動は挑戦の毎日でした。日々の練習は辛いですが、1日1日自分の課題や目標に向かい、練習をしてきました。そのことは中学校3年生の今だからこそ、この夏の挑戦と合わせて書きとめておきたいと思いました。東北大会を終えた今も陸上を続けています。次の目標に向けて私の挑戦は続いていきます。